

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 サラ ヤスミン

バングラデシュは世界でも最貧国のひとつであると同時に、ジェンダー格差の大きな国でもある。したがって経済開発を進めるとともに、女性のエンパワーメント（家庭や社会における女性の地位の改善）が重要な課題となっている。バングラデシュでは乳牛の世話は女性の役割であり、それは所得の向上と同時に、女性のエンパワーメントにもつながる可能性がある。バングラデシュでは、人工授精によりホルスタイン種やジャージー種と在来種を交雑した乳牛が導入されており、乳量が多いことから特にその効果は大きいと見られている。本研究の新規な点は、新技術である交雑種の採用に着目し、小規模酪農の近代的化が女性のエンパワーメントに貢献していることを実証したことである。

本研究ではバングラデシュのふたつの農村を研究対象とする。ひとつは人工授精センターに近く交雑種による近代的酪農が導入された村 V1 であり、もうひとつは人工授精センターから遠いため在来種による伝統的な酪農を続けている村 V2 である。しかし、V1 の中には在来種による伝統的な酪農を続けている女性もいるので、近代酪農を行なっているグループ V1 (M)と伝統的な酪農を行なっているグループ V1 (T)に分けて分析を行なった。V2 は全員が伝統的な酪農を行なっているため、V2 (T)のみである。

まず、第 1 章でバングラデシュにおけるジェンダー格差の現状とエンパワーメントの必要性を文献レビューに基づき記述し、本研究で検証する主要な仮説を提示した。仮説は、「交雑種の利用による近代的な小規模酪農の導入は、農家の所得を増やし、女性エンパワーメントに貢献する」である。

次に第 2 章では、バングラデシュにおける酪農の位置づけを文献に基づき論じた。酪農は GDP に占める比率は低いものの、牛乳の高い栄養価が評価され、牛乳の生産と消費は年々増加している。そのため、小規模農家は、酪農によって所得を増やし、貧困から抜け出すことが可能になる。また、小規模酪農は主として女性により担われているため、女性のエンパワーメントを促進することが期待される。

第 3 章で、まず研究対象とした 2 つの村 (V1 と V2) について記述し、次に

3つのグループ（V1 (M)、V1 (T)、V2 (T)）に属する女性や世帯の特性や経済的状况を分析した。その結果、近代的酪農を行なっているグループ（V1 (M)）の女性は、伝統的酪農を行っているグループの女性と比べて教育を受けた年数が長く、酪農の経験年数も長いことがわかった。また、所得水準で評価した場合、近代的酪農を行なっているグループは、酪農所得だけでなく世帯全体の所得も高いことが明らかにされた。

第4章では、これらの3つのグループの女性のエンパワーメントの水準を計測する。これまでエンパワーメント指数は様々なものが考案されているが、本研究では、バングラデシュ農村の実態に合わせて指数を作成した。その結果、近代的酪農を行なっているグループ V1 (M)のエンパワーメント水準が他の2つのグループよりも高いことが明らかにされた。

第5章では、近代的酪農の採用が、女性の酪農への参加・貢献を増やしていることを明らかにした。さらに、酪農の活動を細分化して、女性のエンパワーメントとの関連を調べたところ、近代的酪農のグループにのみ、ほとんどの活動が女性のエンパワーメントと正の相関を持つことが明らかにされた。

第6章では、第3章から第5章の分析により示唆された近代的酪農と女性のエンパワーメントの関係を、計量経済学の手法を使って、統計的に厳密に検証した。まず、近代的酪農は教育水準の高い女性が採用する傾向にあるが、それだけでなく夫の教育水準が高いほど採用する確率が高いことがわかった。次に近代的酪農の採用を説明変数とした回帰分析により、近代的酪農の採用により女性のエンパワーメントが向上し、世帯所得が増え、女性の酪農への参加も上昇したことが確認できた。また、近代的酪農の採用がもたらした世帯所得の上昇と女性の酪農への参加・貢献の増加のいずれもが、女性のエンパワーメントを高める効果を持つことが明らかとなった。

以上の分析より、伝統的に形成された女性の地位を変えていくために、新しい技術の導入が有効であることが示された。それは、大きな所得を稼ぐことができるということから生じる直接的な効果の他に、女性が酪農へ参加・貢献することで身につけた意思決定力や独立心、自信などからの間接的な効果にも起因する。また、新しい技術を導入するためには女性自身の高い教育水準が必要なだけでなく、夫にも高い教育水準が求められることが明らかにされた。ジェンダー格差の大きいバングラデシュの農村で、女性のエンパワーメントの実現に向けた具体的な方策が独自のデータに基づき示された点は大いに評価できる。

これらの研究成果は、学術上応用上寄与するところが少なくない。よって、審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。